

# ．スポーツのグローバル化とローカリゼーション

---

## < 論考 > :

### 1 ．スポーツのグローバル化とローカリゼーション

岡本 純也

#### 1 ．はじめに

この数年、海外のスポーツ・シーンにおける日本人プレイヤーの活躍が報道される機会が多くなった。特に野球やサッカーなどのプロ・スポーツの分野では、海外のチームへ移籍する選手の数が増加している。このような現象はなにも日本に限ったものではなく、今や世界のトップ・アスリートは、自らの生まれ故郷を遠く離れ、はるか国境を越えた異郷のプレイ・フィールドで活躍することが当たり前になっている。そして彼らの勇姿は、発達した衛星放送網やインターネットによって、彼らの母国だけではなく世界のあらゆる地域へとライブで配信される。また、スター・プレイヤーの身につけているスポーツ・グッズのレプリカ、彼らの名前やチームのロゴが入ったスポーツ・ウェアなどは、瞬く間に商品化されて、世界のどんな街角でもそれらを身につけたファンの姿を容易にみつけられるようになっている。スポーツに関わるこうした人的資源や物的資源、情報などの地球規模での流動化現象は、スポーツにおけるグローバル化（globalization）の現われと端的に言えるであろう。スポーツにおけるグローバル化は、スポーツ・プレイヤーが世界のどこに行っても母国であるのと同じようにプレイすることを可能とし、スポーツ・ファンがどこにいても母国であるのと同じ方法で最上のスポーツを楽しむことを可能とする。いわばスポーツのグローバル化とは、スポーツという文化が地球規模で単一文化化（モノ・カルチ

ャー化）していく過程といえよう。

一方で、一見したところ、その過程に抵抗するかにみえる運動もみうけられる。すなわち、地球規模で広まる文化の単一化に抵抗する多様性をもったローカルな場からの攻勢である。われわれはこれまで、スポーツのグローバル化の一過程として、スポーツの多様化の進展も含めて議論してきたが、ここでは改めてこの過程をスポーツの「ローカリゼーション（localization）<sup>1</sup>」にとらえ、グローバル化とその関係について整理していきたい。本稿では、伝統スポーツに関わるスコットランドの事例を紹介しながら作業を進めていく。

#### 2 ．伝統スポーツからの攻勢

今年（2001年）の4月、スコットランドの新聞の一つ、ヘラルド紙に以下のような記事が掲載された<sup>2</sup>。

「新しい組織による2つのキャンペーン（まだ何と呼ぶかは決定していない）は、グラス・ルーツからエリートのスポーツ活動の促進に責を負う、スコットランドのエージェントを困惑させている。『スポーツ・フォー・オール』はスコットランド・スポーツ協会のスローガンであった。そして、その再編後の継承者であるスポーツスコットランド（sportscotland）においても、理念の中核として位置付け続けている。しかしながらそれは彼らが

起草したルールに従う者だけに提供される『スポーツ・フォー・オール』でしかない、と批判者は言う。シンティー（shinty）、ケルト・レスリング（Celtic wrestling）、クォイティング（quoiting）、カーペット・ボール、ハイランド・ゲームなどの伝統的スポーツ（Traditional Sports）の組織は、スポーツスコットランドが彼らの未来とスコットランドの文化遺産に危機をもたらすであろうと信じている。

スポーツスコットランドのイニシアティブは政府の戦略に従うものであり、オリンピックと公共福祉の分野の財政に連動し、上記の全ての活動はそこから除外されている。しかし、その関係者の数は、スコットランドでは数千、そして、ヨーロッパ全体では数百万にもものぼる。このような話しは、よく聞く話であり、このテーマのバリエーションはフランス、イタリア、スペイン、デンマーク、アイルランド、ベルギー、オランダでも見ることができる。現在、彼らは、ヨーロッパ議会や彼らを代表する政府に対して反旗を翻している。（以下省略：The Herald, April 28, 2001）

「スポーツスコットランドとの財源をめぐる闘争において伝統的スポーツはヨーロッパの同盟に協力を求める - 民族スポーツは公平な取り分を要求する - 」という見出しが付けられた上記の記事は、スコットランドの伝統スポーツ（Traditional Sports）の諸団体が、スコットランド全体のスポーツ統轄組織である「スポーツスコットランド（sportscotland）」に対して財政的支援を訴え、フランスで開催されるヨーロッパ各国の伝統スポーツの代表者が集まる会議に彼らの代表を送り出しているということを紹介している。記事の省略した部分によれば、この会議には開催地となっているフランスのブルターニュ地域から 23 の組織、フランスの他の地域から 15 以上の組織、さらにヨーロッパ 16 カ国のスポーツ関係者など、それぞれの代表が一堂に会し、ヨーロッパ議会や UNESCO、各国政府への働きかけなど、今後の彼ら伝統スポーツ組織の活動について話し合いがな

されるという。彼らの主張の中心は「文化遺産（cultural heritage）を保持する手段として身体トレーニングやスポーツを促進する際に、伝統的ゲーム、ダンス、スポーツを守ること、発展させること」に置かれている。「われわれはみな税金を支払っている。税金に対してわれわれに平等な権利があるならば、スポーツやレジャーの分野においても平等に扱われるべきである」という、新しい汎ヨーロッパ組織の主導者の主張に表れているように、彼ら伝統スポーツの担い手は、近代スポーツの促進・発展ばかりを支援し、彼らの存在自体を正式に認めようとしなない各国政府やスポーツ諸団体に対して不公平感を抱いているのである。

この記事で紹介されている事象で興味深い点は、第一には、正統性を手にしている政治や文化の「中心なる存在」 政府、（近代）スポーツ統轄組織に対して、これまで非正統とされて省みられることがなかった「周辺なる存在」 伝統スポーツ諸団体が自己主張を始めているということであり、第二には、これまでの政治的システムでは中央集権的に 中央を一度介して 結びつかざるを得なかった「周辺 = ローカル」 どうしがダイレクトに結びつき、ある種の力を持ちつつあるということである。このようにとらえるならば新聞記事に取り上げられたテーマは、「近代 対 伝統」「近代化の進行によって失われていく伝統文化」という 20 世紀的な陳腐化した単純図式では把握できない問題性をはらんでいることが理解できる。

### 3 . グローバリゼーション = 近代化の激化

地球規模で統一ルールを保持し、それを IOC が中心になった官僚機構で管理していくという近代スポーツのあり方は、特定の地域の人々によってその地域独自のルールで楽しまれるという伝統スポーツのあり方とは対立する。この対立は一見するところ「グローバルな存在」対「ローカルな存在」の対立、または先述のような「文化の単一化」に対する多様性からの攻勢とみてとることができ

る。かつてグットマンが描いた「文化帝国主義に抗う旧植民地のスポーツ」というテーマにもよく似た図式である<sup>3</sup>。しかし、スポーツにおけるこのような対立軸を、単純に「グローバル化対ローカル化」という対立軸に還元してしまってはならない。というのは、多様なローカルな場からの自己主張は、まさにグローバル化の中でこそ成立する現象であると考えられるからである。以下、アンソニー・ギデンズによるグローバル化理論にしたがい、その理由を述べていく。

グローバル化の理論的な位置づけを試みている社会学者ギデンズは、その定義を以下のように行っている。

「グローバル化とは、離れた地域ごとを結びつける世界規模の社会関係の激化のことである。その中では、地域的な出来事が離れた場所で生じた出来事によって形作られ、同様に、離れた場所の出来事が地域的な出来事によって形成される。またそれは、社会の発展の制約条件としての地理的な要因、空間的な要因および時間的な要因の縮小を導くプロセスである。それは、世界を全体としてとらえる認識の増加と、国家を越えた国際的で地球規模の方向への社会的な思考や行動の再調整に起因している<sup>4</sup>。」

ギデンズによると、グローバル化は近年にわかに成立したのではなく、17世紀に西欧世界で出現し、以後世界中へ広まった近代化(modernity)の過程の帰結とされる。ただし、今日の交通・通信技術のめざましい発展によって彼のいう近代化はより加速され、その著しく激化した近代化の過程を彼はグローバル化と呼ぶのである。

いうまでもなくその進行によって成立した典型的システムの例は現在の市場経済であり、ある地域の悪天候による農産物の不作は遠く隔たった地域の野菜や穀物の価格高騰を導くかもしれないし、ある地域に起きた地震の影響で、世界中のコンピ

ューターの生産・販売ラインがストップしてしまう可能性も今日にはあるのである。そしてこのような過程の主たる動因としてギデンズは「情報とコミュニケーションの技術の成長および進歩」を第一にあげる<sup>5</sup>。衛星放送網やインターネットなどの技術発達が、それまで人と人、地域と地域を結びつける上で制約条件となっていた時間、空間の問題を取り払うことにより、この過程は加速化されていくというのである。

ギデンズのいうようにグローバル化をとらえるならば、上に紹介した、伝統スポーツの維持・発展を目指す汎ヨーロッパ組織の成立とは、まさにその過程でこそ成立する地域間を結びつけた社会運動であるといえる。先に述べたように、それは国境を越え、国家という枠組みにとらわれない、地域どうしが直接的に結びつく社会運動として成立している。これは、ギデンズがいうように「世界を全体としてとらえる認識の増加と、国家を越えた国際的で地球規模の方向への社会的な思考や行動の再調整」に関係しているのだろう。国家という枠組みの中でとらえた場合には、マイノリティであり、力を持たない存在であっても、世界全体を見渡した場合には、同様な境遇で苦しんでいる多数の同志がみつき、力を持った運動が成立するのである。インターネットをその典型とする、世界規模に広がった情報の網は、瞬時に世界に散らばって存在する仲間を探しだして直接的に結びつけることに貢献するだけでなく、自分たちの問題を世界全体の問題の中でとらえ直すという思考方法をもわれわれにもたらしたのである。したがって、上記の運動の目指すところが地域の伝統文化の維持・発展であるとしても、運動のあり方自体はグローバル化の進行に抗うものではなく、むしろその典型例としてとらえてもいいであろう。先に「ローカルな場からの攻勢は、グローバル化に対立するものではない」と述べた第一の理由はここにある。

#### 4. グローバリゼーションと

##### 地域アイデンティティ

第二の理由は、グローバリゼーションにおけるわれわれの自己認識（アイデンティティ）に関わる。ギデنزはいう。

「地球規模での社会関係の発展は多くの場合、国民国家（もしくは国家）と結びついたナショナリズム的感情のある側面の減少に寄与する。しかし、おそらくは、より局所的な（localized）ナショナリズムの感情の激化に影響を与える。……その過程の一部として社会関係が横へ広がるのと同時に、地域的自治と地域の文化的アイデンティティの高まりがみられるようになる<sup>6</sup>。」

ここでギデنزが想定しているのは、近年のヨーロッパや他の地域における国家内部の民族主義や地域主義の台頭である。グローバリゼーションの加速化にしたがい、近代国家は制度疲労を起こし、より広い国際的な社会関係を作っていく上で制約となったり意味をなさなくなったりする。同様に、これまでわれわれのアイデンティティの枠組みを強く規定してきた、国家に起因するナショナリズムの感情も凝集性を失いつつある。しかしながら、一方でグローバリゼーションの中では、自己という存在が世界全体の中でどのように位置付くのが常に問われるようになる。国家による強いアイデンティティ規定から解き放たれ、一方で個人のアイデンティティが問われるという、アイデンティティの危機的状態の中で、国家に代わってそれを補完するのが「民族」や「地域」「宗教」という、国家よりも個人の生活に近い存在に基づくアイデンティティであると考えればよいであろう。

ここに興味深い統計データがある。スコットランドの新聞スコッツマン紙が今年の4月に実施した、「地域への帰属意識の調査」である<sup>7</sup>（表1参照）。1000名以上を対象としたインタビュー調査の結果によると、「あなたは自分自身を英国人

（British）であると思うかスコットランド人（Scottish）であると思うか」という質問に対して、81%（男：82%，女：80%）が「よりスコットランド人」であると答えているのである。それに対して、「より英国人」であると答えた者は男女ともに4%、「スコットランド人と英国人半々」と答えた者が13%（男：12%，女：14%）であった（上記以外：男女とも2%）。実に対象者の5分の4が自らを「英国人よりもスコットランド人」とであると認識しているのである。スコッツマン紙によると10年前に実施した同様の調査の結果では、「よりスコットランド人」であると答えた者は3分の2以下であったという。すなわち、この10年でスコットランドに対して愛着をもつ者の割合が急激に伸びているのである。

表1 「あなたは英国人ですかスコットランド人ですか」

	合計(%)	男(%)	女(%)
英国 < スコットランド	81	82	80
英国 > スコットランド	4	4	4
英国 = スコットランド	13	12	14
上記以外	2	2	2

(The Scotsman, April 28)

この結果を、東欧でみられるような「(政治的な)分離独立を求める声の高まりとは直接的には解釈できない」とスコッツマン紙は分析する<sup>8</sup>。それは以下の調査結果による。

「あなたにとって一番重要な地域的枠組みは？」という質問に対して、「現在住んでいる町（town）」という回答が34%（男：33%，女：36%）、「スコットランド」という回答が33%（男：38%，女：29%）と高い割合を示し、以下、「自分の生まれた町」14%（男：11%，女：16%）、地球10%（男：10%，女：11%）、英国4%（男：5%，女：4%）と続き、「ヨーロッパ」と答えた者は0%であった（表2参照）。

要するにスコットランドに住む人々は自分の「町」に愛着をもち、同様に自分の住むスコットランドにも愛着を持っているだけだとスコッツ

マン紙はいう。そして、社説では「おそらくグローバリゼーションの台頭によってもたらされた人間のよりどころのなさ (uncertainties) や文化の均質化 (cultural homogenisation) が最近のスコットランドの愛国心 (patriotism) の本当の説明には存在するのであろう」とグローバリゼーションとの関係で愛国心の高まりについて分析する。続けていわく。

「ソーキーホール・ストリートからロデオ・ドライブまで、店のウィンドウには同じ洋服や生活様式が売っているような状況の中で、われわれは単に、何かユニークでアイデンティティのよりどころとなるものが欲しいだけなのだ。ダンディーからデンバーまで同じハリウッド映画が上映される中で、われわれはちょっと文化的独自性を持っていたいだけなのだ。バスゲイトからボストンまで、同じようなハイテク不況に仕事がおびやかされる中で、われわれは『ホーム(Home)』と呼べるような安心をもたらしてくれるものが欲しいだけなのだ<sup>9</sup>。」

表2 . 「あなたにとって最も重要な地域的枠組みは」

	合計 (%)	男 (%)	女 (%)
現在住んでいる町	34	33	36
自分の生まれた町	14	11	16
スコットランド	33	38	29
英 国	4	5	4
ヨーロッパ	0	0	0
地 球	10	10	11
上記以外	2	2	2

(The Scotsman, April 28)

## 5 . 「スポーツ = 非日常」における

### アイデンティティの確認

上記、スコットマンの社説の言葉には、現在の近代化された生活を楽しみながら、その中でスコットランドへの愛着を深めている人々の意識が

よく表されている。それはアンケートの次の項目への回答結果をみてもよく理解できる (表3 参照)。

スコットランドのイメージを聞いた質問に対して、67%の者が「近代的」であり、60%の者が「エキサイティング」であると答えているのである。そして、69%の者がスコットランドは「ハッピー」であると答えている。すなわち、これらの回答からは、スコットランドの人々は伝統的で古くからの生活様式を保持しながら愛国心を高めているのではなく、「モダン」で「エキサイティング」な生活を肯定しながら愛国心を高めているということが導かれる。過度な地域主義の台頭により、グローバルな文化や生活様式を拒絶しているわけではないのである。この現象をスコットマン紙は「新たなる愛国心の誕生 (Birth of a new patriot)<sup>10</sup>」と称し、かつてのシリアスな愛国心と区別している。

表3 . 「スコットランドのイメージは」

	合計
モダン Modern	67%
後ろ向き Backward	14%
ダイナミック Dynamic	38%
狭い視野 Narrow Outlook	30%
長老会派教会 Presbyterian	37%
カソリック Catholic	17%
ハッピー Happy	69%
若々しい Youthful	58%
不景気 Depressing	23%
古い Old	43%
トレンドリー Trendy	44%
エキサイティング Exciting	60%
時代遅れ Old fashioned	47%
起業家 Entrepreneurial	44%

(The Scotsman, April 28)

このような「新たなる愛国心の誕生」と、スポーツスコットランドや行政に対して異議申し立てをし、汎ヨーロッパ的伝統スポーツの復興運動

に加わるスコットランドの伝統スポーツ諸団体の動勢はシンクロしていると考えられる。なぜならば、スポーツとは非日常の活動であるがゆえに、日常の快適な近代的生活を安全な場所に置いておきながら、一時的にプレイの場に現出する「伝統文化」の中で、心おきなくアイデンティティの確認が行えるからである。ヘラルド紙に紹介されている伝統スポーツの多くのプレイヤーは、プレイの際に、スコットランドの伝統的民族衣装とされているキルト(kilt: チェック模様のスカート)を身に纏う。しかしながら、彼らが日常生活の中で常にキルトを身につけているわけでは当然ない。同様に、音楽は民族音楽しか聴かないわけでもないし、テレビやコンピューターを拒絶していることもないであろう。「新たなる愛国心」の保持者にとっては、伝統スポーツの場とは、格好のアイデンティティ確認の場となるのである。

このように考えてくると、グローバル化の進行に伴って、伝統スポーツの役割がより重要になってくることが理解できよう。世界に共通する生活様式を受け入れコスモポリタン化する当事者にとっては、唯一、自ら愛着を持つ土地に繋がることのできる場であり、ゆえに存在証明のために必要不可欠な場となるのである。

スコットランドにおける「新たなる愛国心の誕生」という現象を見る限り、「伝統スポーツの維持・発展」を謳った上記の運動は、今後、より確かなものとなると予測される。しかしながら、それがスポーツに関わるものであるがゆえに、運動が確かなものになればなるほど、内部に矛盾を抱えることになるであろう。すなわち、近代スポーツが歩んできたように、統一ルールを作成し、中央組織がそれを管理するようになれば、地域的な独自性は払拭されていかざるを得ない。たとえば、スコットランドの伝統スポーツが普及し、より国際的なスポーツになれば、柔道が「判定のしやすさ」「観客にとってのわかりやすさ」を追求するために「伝統的」な白の柔道着のみのプレイを棄却してカラー柔道着を導入したように、キルトを着用したプレイスタイルを捨てなければならな

い時が来るかもしれない。

「伝統スポーツの普及」という運動には、ここで見てきたような、一方でグローバルな方向へと広まっていき、その他方で局在化する方向へと向かうグローバル化の二方向のベクトルが複雑に働いている。したがって、今日のスポーツのグローバル化という現象を把握するためには格好の素材を提供するものと考えられる。今後もそのような視点で伝統スポーツの動勢に注目していきたい。

- 
- 1 ここでは「全世界(全体)= global」に対する「局所=local」という意味で「ローカル」という語を使用している。したがって、本稿では「地域 area」的な問題を扱っているが、必ずしも「ローカル」とは場所や空間に関係した地理的概念とは考えない。たとえば、世界全体のスポーツ・システムをグローバルとして考えれば、日々、われわれが経験するスポーツ実践のそれぞれは「ローカル」なスポーツ活動であると考えられる。全体に対して局所に限定されたルールの制定や新たなる種目の開発などはローカリゼーションの現れと考える。そのようにとらえるならば、生涯スポーツのための種目の多様化、障害に応じた障害者スポーツの開発などもこの概念的枠組みの範疇に含まれるであろう。
  - 2 The Herald, April 28, 2001
  - 3 アレン・グットマン, 谷川稔ら訳, 『スポーツと帝国 - 近代スポーツと文化帝国主義 - 』, 昭和堂, 1997年
  - 4 Giddens, A, The Consequences of Modernity, Polity Press, 1990, p64  
本訳文は London School of Economy の著者のホームページ「Globalization」の項から引用。上記著書の参照箇所の内容とほぼ一致する。
  - 5 同上ホームページ「Modernity」の項参照  
あわせて同上書参照
  - 6 同上書 65 ページ参照
  - 7 The Scotsman, April 28, 2001
  - 8 同上
  - 9 同上  
この文章では、スコットランドの地名とアメリカの地名を前後に並べ、アメリカとスコットランドの文化的な均質化を強調している。
  - 10 同上